
旅人と嘘

秋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅人と嘘

【Nコード】

N1949U

【作者名】

秋月

【あらすじ】

あるところに、旅人がおりました。

彼は旅の途中で、小さな町に立ち寄ります。その喫茶店にいた男の紹介で、旅人は大きな御屋敷に向かうことに。

そこで出会ったお嬢様は、少し変わった方でした。

むかしむかし、あるところに、面白いものや、新しいものが大好きな、一人の若い旅人がおりました。

ある時、その旅人は、一つの小さな町に立ち寄りました。

その町は、小さいながらも明るくて雰囲気の良い町でした。レンガ造りの建物が立ち並び、踏みしめる地面は程良く整備されて、なかなか、絵になる風景でした。

町の人の明るい声を聞きながら、旅人は楽しく町をひとまわりしましたが、この町には、これといった名所や名産品がなく、旅人は少し退屈に思っていました。

暇を持て余して、安い喫茶店で紅茶を飲んでみると、町の男が、旅人に声をかけてきました。

「やあ、旅人さん。この町はどうだ」

「あまり面白いものありません」

旅人が正直に答えると、男は大声で笑いました。

「そうかい。ならば、まだあのお屋敷には行っていないんだな」

そう言う男の顔は、イタズラをたくらむ子供によく似ていました。

旅人はその表情に、とても興味が湧きました。

「あのお屋敷とは、どのお屋敷のことですか」

「そりゃあ、その、役所の裏にある豪邸のことさ」

「あのお屋敷のことでしたか」

男は、この町の中でも一際大きく、豪華なたたずまいのお屋敷の方を指さしました。そのお屋敷は、旅人も一目見たときから、気になってはいたのですが、豪邸などは、豊かな国に行けば腐るほどあるので、特別に変わったことでもないと思い、見逃していたのでした。

「そこには、何か面白いものがあるのですか」

「面白いというよりは、変わった人だな」

旅人の反応を見ながら、男はもったいぶって言いました。それから、少し考えるようなそぶりを見せました。旅人は根気よく、説明を待ちましたが、男は上手く言葉がまとまらなかったらしく、結局それ以上は教えてもらえず、

「実際に見に行ったほうが早い」

と言われてしまったので、旅人は男に礼を言つて、背中中、男の「後で感想を聞かせてくれ」という言葉を聞きなが、喫茶店をあとにしました。

男が紹介してくれたお屋敷は、すぐに見つかりました。背が低い家が多い中で、その豪邸はあまりに目立っていたからです。

お屋敷には広くて手入れの行き届いた、華やかな庭がありました。そこで、若い女の給仕が掃除をしていました。

丁度いいと思い、旅人はその給仕に声をかけました。

「すみません。ここに、変わった方がいるときいたのですが」

給仕はいきなりの言葉に、首をかしげました。

可愛らしい給仕の動作に、旅人が見とれてみると、給仕は「あと小さく、声をあげました。」

「もしかしたら、お嬢様のこともしれません」

「お嬢様、ですか」

オウム返しに旅人が尋ねました。すると、給仕は周りに人がいないのを確認して、旅人に耳打ちしました。

「実は、うちのお嬢様は――」

給仕の話を聞いて、旅人はお屋敷のお嬢様に会ってみたいと思いました。

旅人がそう言うと、給仕は快諾して、旅人を客間に通してくれま

した。通された客間も、外観と同様に華やかで、さつき男と話していた喫茶店とは、天と地の差です。

柔らかないソファでリラックスしていると、先ほどの給仕が一人で客間に戻ってきました。

「お嬢様は、お部屋から出ることが出来ませんので、お嬢様のお部屋にご案内いたします」

旅人はおとなしく、給仕のあとについていきました。通った廊下も豪華な造りで、旅人は少々居心地悪く感じました。

長い廊下を、給仕のあとについて歩き続けると、特別にきらきらした扉が見えました。どうやらそれが、お嬢様のお部屋ようです。旅人は、あまりの派手さに、すっかり呆れていましたが、声にすることはなく、給仕に続いてきらきらした扉をくぐりました。

部屋の中は外以上にお金が使われているようでした。アンティーク調の調度品がひしめきあっていて、旅人に大きな衝撃を与えました。ここまで贅沢な部屋は、豊かな国でもそうはお目にかかれないのです。

「御苦労様。もう下がっていいわ」

幼い少女の声に反応して、視線を動かすと、そこにはピンク色の天蓋付きのベッドが威風堂々と置かれていました。

ベッドの中では、十代前半の少女が儂げな顔で佇んでいました。

どうやら、彼女がお屋敷のお嬢様のようです。

お嬢様の指示に従って、給仕は黙って席をはずしました。高級な家具で埋め尽くされた部屋に、お嬢様と旅人の二人が残されました。お嬢様は、上品に口を開きました。その体は、まだベッドに入っただけです。

「どうして、お部屋に呼んだのか、気になるのでしょうか」

「え？」

旅人は、特に何も考えてはいませんでした。お嬢様は気にせず続けました。

「だって、普通は客間でお話するでしょう。わざわざお部屋まで通

すなんて、おかしいじゃない」

「そう言われてみれば、そうですね」

そうとも限らないんじゃないか、と旅人は思いましたが、話の流れに合わせて相槌を打ちました。

そんな旅人の心中を察してか、お嬢様はくすりと、おかしそうに口元をほころばせました。

「どうして、そこから出てこないんですか」

ベッドの中のお嬢様を指して、旅人が言いました。

きしり、とベッドの木材が軋む音が、旅人の耳朶に触れました。

それと同時に、布団の隙間から、白くて細い右足が生えてきました。しかし、そこで音は一旦止まりました。

そして、遠慮がちに布団から顔を出した左足には、赤黒い皮膚のただれが、着物の裾から覗いていました。

旅人は息をのみました。お嬢様の左足は、血の気が無く、壊れた人形のものであったからです。

「痛くはないわ。感覚が、ありませんから」

そう言うお嬢様の声は、寂寥を帯びていました。

「この足は、幼い頃に、町の外れに住む怪物に噛まれて以来、一度も動いたことはありません。お父様は、その怪物にのまれました。

この屋敷は、お父様の忘れ形見なんです。

そしてお母様は、私の足を治す方法を探して、世界中を飛び回ってくれています。」

旅人は、お嬢様の語りに、静かに耳を傾けていました。お嬢様の言葉が途切れたところで、旅人は疑問を口にしました。

「なぜ、そのようなことを、私に言うのですか」

「あなたは、世界中を旅しているんでしょう。ならば、私のお母様に会ってはいないかしら。旅の途中で、今の話と似たようなことを話した女性は、いませんでしたか。私はそれが訊きたくて、あなたを呼んで、話をしたの」

溢れんばかりの想いを、お嬢様は必死で押し込めて言葉を紡いで

いる様子でした。紡がれる鈴の音のような声は、小刻みに震えて、布団の上のこぶしは、固く握られています。

旅人は、そんな姿を不憫に思いました。気がつくと、頬には熱い滴が流れていました。

「残念ながら、そのような方には、お会いしていません。お力になれなくて、申し訳ありません」

「そんな顔をなさらないで。話をきいてくださっただけでも、ありがたいわ。いつか、私のお母様の話を耳にされたら、その時は、教えに来てくださいね」

涙を流す旅人に、お嬢様は聖母のように、とびきり優しく微笑みました。旅人は、お嬢様の笑顔に、涙を拭いて、微笑みを返しました。

「どうでしたか」

お嬢様のお部屋から、赤く腫れた目で出てきた旅人に、給仕が含み笑いを向けました。

不謹慎ともとれる給仕の態度でしたが、旅人は腹を立てることはありませんでした。それどころか、給仕の声に振り向いた旅人の顔も、笑いをこらえているような表情を浮かべていました。

「いやはや、驚きました。凄いですね、

あの、大嘘つきのお嬢様は」

そうでしょう、と給仕はついにふきだしました。つられて旅人も、大声で笑ってしまいました。

「おかえりなさい、お父様、お母様」

大きなお屋敷に住んでいるお嬢様は、買い物から帰宅した両親に

駆けより、母親に抱きつきました。玄関の隅では、給仕が目を細めて、その様子を眺めていました。

お嬢様の父親は、着物の裾から出たお嬢様の足を見て、目を丸くしました。

「その足は、一体どうしたんだい」

「給仕に描いてもらったの。上手でしょう。まるで本物の怪我みたいだわ」

「もう。また、お客様で遊んだんでしょう」

怒った母親の声に、お嬢様は悪びれることなく答えました。
「だって、暇なんですもの」

大きなお屋敷を訪ねた次の日、旅人は町を出ました。

お嬢様のお茶目な嘘以外には、この町に見る物は無かったです。町を出る直前、喫茶店で会った男に再会しました。

「旅人さん、どうだった」

男はわくわくしながら、旅人に訊いてきました。

「とても面白かったです。教えてくださって、ありがとうございました。本当に、変わった方でした」

旅人がそう言うのと、男は満足げに口の端を歪めました。

「うちの子の演技は、なかなかだったろう。将来は大女優さ」

旅人は、言葉を失いました。この、普通の男が、あの大きなお屋敷の主だとは、とても思えませんでした。

「しかも、君が泣くようなシナリオを、一晩で考えちまうなんて、作家の才能もあるんじゃないかな。どう思う？」

お屋敷の主は、随分と子煩悩なようです。旅人は、呆れ果てても言えませんでした。そんな旅人を置いて、男は喜々として娘自慢を語りました。

「ところで、娘の話の中で、お父さんはどんな風に語られてたか？ 格好良く話してくれていたか？ 実は、どんな風に話されていたかって、皆にきいてるんだけど、誰も教えてくれないんだ。なんで

だろっな」

怪物に食われて死んでいた、などとは、口が裂けても言えなかったのは、言うまでもないでしょう。

（後書き）

……これは、ファンタジーなのでしょうか？

検索キーワードになんて入れようかと、凄く悩みましたww

あとがきとしては、書くことはないんですが、一応報告ということ
で。

この話は、私の部活の部誌にのせた話なんです。

なので、もしかしたら、見たことがある方がいらっしゃるかもしれ
ませんが、ノーコメントでお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1949u/>

旅人と嘘

2011年6月19日07時56分発行